

交流セミナー

戦略的プロジェクト「妊娠高血圧症候群の看護のエビンスを考える」 最新の関連文

献と家庭血圧に着目した研究の紹介

○齋藤いずみ¹⁾ 遠藤俊子²⁾ 井上京子¹⁾ 岡田真奈²⁾ 長野なおみ¹⁾ 岡邑和子³⁾ 佐藤陽子⁴⁾ 安田美緒⁵⁾

1) 神戸大学大学院 2) 京都橋大学 3) 兵庫県立大学 4) 昭和大学病院 5) 京都府立医科大学附属病院

I 諸言

日本母性看護学会の戦略的プロジェクト委員会では、母性看護分野における臨床への貢献成果をデータとして実証し、将来、診療報酬体系に盛り込まれることを目標として活動中である。高齢妊産婦の増加により、妊娠高血圧症候群、妊娠糖尿病などがかかえる女性への看護は、今後重要性がさらに増すと考えられる。そこでこの二つを、診療報酬体系に採択される重点目標とした。戦略プロジェクト理事である齋藤いずみと遠藤俊子が、「妊娠高血圧症候群」を担当している。

診療報酬に採択されるまでには、各学会で研究を積み重ね、データを蓄積し、看護系学会等社会保険連合に提出し、そこでさらに精選され、2年に一回の診療報酬改定時に膨大な資料を提出し、その中のごく一部が採択される仕組みである。

今回、我々のまだ歩みだしたばかりの取り組みであるが、その一環を紹介し、ぜひ多くの人と語り合い、刺激をいただきたい。また、最新の文献や知見を紹介し、臨床現場に還元できることが一つでもあればとてもうれしい。私（齋藤）自身もいかに、妊娠高血圧症候群、基礎となる血圧、栄養、安静度のことなどを、十分には理解していないがよくわかり、自分の大きな学びとなった。

II 研究の紹介

妊娠高血圧症候群に関する研究班は、研究者と母性看護専門看護師と大学院生を主なメンバーとして活動している。井上・長野は、まず家庭血圧に注目した。その理由は、2014年4月、高血圧の診療方針をまとめた「高血圧治療ガイドライン」（日本高血圧学会）が5年ぶりに改訂された。その中で、大きなポイントとして示されたのが、家庭で測定する「家庭血圧」の評価である。「診察室血圧と家庭血圧の間に診断の差がある場合、家庭血圧による診断を優先する」と記されたように、これまで以上に家庭血圧を重要視する内容になった。今回井上、長野による「家庭血圧を測定した妊婦の血圧の推移」について研究の一部を紹介する。また、血圧や栄養に関する意外と知られていない最新の知見を紹介したい。臨床で明日から使える知識となると思われる。母性看護専門看護師の皆さんが臨床で、妊娠高血圧症候群の患者に対し、どのような観察や看護を実施しているのか、データベースを作るために現在研究会を重ねている途中である。現在データベース用の基本データセット内容を作成したところである。皆様からたくさんのヒントを、今回の交流集会で、ぜひともいただきたい。